

全力で聴く。 全力で届ける。

政党の背骨、 政策の骨格を今こそ

参議院議員 石上 俊雄



国破れて山河あり

今回の衆議院選挙は、2年前、2012年12月と同様の惨敗で、民主党にとって二度目の衝撃、セカンド・インパクトとなりました。もともと大勢の“声なき声”を代弁し、選挙では毎回、目玉商品（例えば「最低保障年金」や「子ども手当」。当初は「マニフェスト」自体が売りだった）を掲げ、勢力拡大してきた政党ですが、ここ2回はその議論も不十分のまま選挙戦になだれ込み、“政権公約を掲げて政権交代をめざす”という在るべき姿からはほど遠いのが現実でした。「戦乱の中、国は敗れてしまい減茶苦茶で言葉もないが、故郷の山や川は元のまま」との漢詩がありますが、今わたしは、全国津々浦々でこの選挙を支えていただいたみなさんを思い浮かべながら、ここに至る道のりを何度も反芻しています。臥薪嘗胆。みなさんへの感謝の念は、今後の行動で表現していきたいと考えています。

やるべきことはわかっている

民主党には今、何が必要でしょうか。「成長戦略」などとアベノミクスで使い古された言葉を使わずに言えば、とにかく日本の製品やサービスを海外でたくさん買ってもらうこと、海外からの観光客や流入する資本を加速的に増やすこと。つまり富が国内に着実に流れ込む取り組みが必要です。そして次に、その富の偏在、国内格差の縮小です。株価上昇や大企業のベースアップはよいことです。しかしそれ以上に、中小・零細さらには非正規の方々の所得が増

えていく理想も何とか実現したい。その理想が現実を引っ張り、慣習に身を落ち着け、ついには法の一部として確定するのかどうか。百年単位で見れば世界中どの国も、そういう“歴史的な分水嶺”に立っているわけで、派遣法改悪ストップの意義もそこにあるはずですよ。やるべきことはわかっている。そしてその実現方法として、国の借金増大というバラマキ的な手法が使えないことも、わたしたちは十分に理解しています。“ワニの口”のように開いていく歳入・歳出のアンバランスは持続不可な国家運営です。

単なる賛成・反対の二分法的な議論を乗り越えて

“国破れた”あとではありますが、個人的にはこの政治状況に絶望ばかりではありません。むしろこの状況だからこそ本音の議論がしやすいとも考えます。これまで「政策がバラバラ」との民主批判がありました。安全保障や憲法議論、原発再稼働問題、さらには日本産業の生きる道など、単なる賛成・反対の二分法的な議論では語り尽くせない重要な政策分野がありますが、こうしたテーマにも果敢に取り組んで、党の背骨、政策の骨格をしっかりと固めていきたい。そのためには本音のぶつかり合いが必要でしょう。ただ、お互いの敬意は忘れずに、また本音といっても甘えを混ぜ込まない議論を心がけるべきです。“あちら立てればこちら立たず”ですが、政治はその困難を克服してこそですので、ぜひご支援・ご指導を引き続きよろしく申し上げます。